外来語「アワード」から考えた「綴り字発音」とその理解度

Spelling Pronunciation And Its Intelligibility Considered From the Japanese Loanword “アワード”

山田昇司
YAMADA Syouzi
経営学科
syouzi@alice.asahi-u.ac.jp
キーワード：外来語、綴り字発音、音声理解度

<要　旨>

本論を書くきっかけになったのは「アワード」というカタカナ語が、ある週刊英字新聞の中で使われていたことだった。原音を無視した綴り字発音のこの語は近年ずっと私を不愉快にさせる耳障りな言葉だったが、調べているうちにいわゆる<綴り字発音>というものは日本語に取り込まれたカタカナ外来語だけでなく英語の母語話者においても現れる現象であることが分かってきた。そしてそのような<綴り字発音>のカタカナ外来語や英語、つまりそういった発音変種はどれくらい相手に理解されうるものなのかという疑問が次に湧いてきた。この疑問についてさらに解明を進めた結果、この変種の音声理解度は英音法のコアである<強さアクセント>を効かせることで実際の英語の音に近づき、実際のコミュニケーションの場においては文脈や応答によってその理解度はさらに高まるということが判明した。また併せて、このような音声変種の捉え方は近年ますます増加しつつある非母語話者も使用する英語「国際英語」をイメージする時にはとても有益であることも分かってきた。音声理解度についての上記の仮説は、変種の種類、話者の母語による差異などにも着目した検証（モニター調査）が必要であるが、それは今後の課題である。

1　カタカナ外来語「アワード」の生成過程

私は随分前からテレビやインターネット上で「アワード」という言葉が使われていることが気になっていた。授業でこの単語が出てくるといつも「awardはwar, warm, warnなどと共に［ɔː］と発音する。綴り字の通りに発音してはいけない」と強調し、ある時には「○○アワード受賞」と書かれた車のパンフレットを持ち込んでその誤りを指摘したこともあった。どうしてそんな間違ったカタカナ語を使うのだろうかといつも少し腹立たしい気持ちを持っていたのだが、ある日ついにその言葉を「英語学習紙」の中でも見つけることになった。そしてそれが本論を書くきっかけとなった。

1－1　英語学習紙に登場した「アワード」

先月の初旬（2009年6月）のことであったが、私がいつも目を通している週刊英字新聞の日本語解説の中に「○○アワード」という言葉を見つけた。私はこの言葉がその第一面に「英語学習紙」と銘打った週刊英字新聞で使われていたのに少々驚いた。このカタカナ語は日本語としてもう認知されているのであろうか、仮にそうであってもそれをよりによって「英語学習紙」で使うのはちょっと不味いのではないか、私はそんな疑問や不満、そしてわずかの苛立ちも感じながら、その新聞の編集部に電話をかけ

てみた。

すると、偶然にもその記事を書いた女性が電話口に出て次のような返答をされた。この言葉は『記者ハンドブック』にはまだ載っていないが、慣用として用いられている、カタカナ語は例えば「フイルム」のように原音との差異が生まれることがあるが、この語も聞きようによっては「アワード」と聞こえる可能性がある、「○○賞」とすれば問題はなかったろうが、この件については一度編集会議で話題にしてみましょうということだった。私は検討結果は何らかの形で教えてもらえますかと食い下がったが、それに対する確約の言質はなかった。

相手の方は英語を実際に「使って」仕事をしているのだから、それをほとんど「教えている」だけの私がとやかく言う資格はないのかもしれないが、私には何か釈然としないものが心と頭に残り、この件について少し突っ込んで調べてみようと思った。

１－２　他にもあった原音無視の「アー」

まず最初にやったことは手元にあったいくつかの英和辞典でawardの発音を確認することであった。予想した通り発音記号は全て［əwɔ́ːd］であり、カタカナ発音表記を採用しているものには「ア**ウォ**ード」「ア**ウォ**ードゥ」の２通りがあった（註１）。明らかに「オー」であって、「アー」ではない。女性記者が言うように「聞きようによってはアーに聞こえる」とは私にはとても思えない。

私は次に寺島（2000：210－212）も参考にしながら、同様の語（war＋子音）を抜き出してみた。するとreward, war, warble, ward, warm, warm-up, warn, warning, Warner Brothers, wardrobe, warp, wart, swarmなどの単語が出てきた。

そして次にその中から外来語として日本語に取り込まれていると思われるものを拾い出してその読み方を２通りに分けてグーグル検索にかけてみた。

warm-up	ウォームアップ（1,390,000件）	＞	ワームアップ（553,000件）
warning	ウォーニング（130,000件）	＜	ワーニング（686,000件）
Warner	ウォーナー（249,000件）	＜	ワーナー（4,280,000件）（註２）
wardrobe	ウォードローブ（2,470件）	＜	ワードローブ（911,000件）
warp	ウォープ（521件）	＜	ワープ（2,110,000件）
award	アウォード（271,000件）	＜	アワード（2,460,000件）

この結果を見ると、「アワード」はすでに「アウォード」の10倍近く用いられており、すでに慣用の地位を確立しつつあることが分かる。「ワーニング」についても、もう一方の「ウォーニング」を完全に打ち負かしている。これはふだん私が感じていた使用頻度の実感を裏付けるものであった。

その一方で私にとって驚きだったのはむしろ「ワープ」（ゆがめる）、「ワードローブ」（洋服ダンス）、「ワーナー」（映画社の名前）の方であった。というのは、これらのカタカナ語については私はすでに全く違和感を感じなくなっていて、元の綴りと原音のことを考えたことすらなかったからである。それではこのような＜表記のゆれ＞は一体いつどのようにして生まれてきたのであろうか。次節ではその調査結果について述べる。

１－３　＜表記のゆれ＞のルーツを探ってみると・・・

私は次の４つの組について『現代用語の基礎知識』のバックナンバー（1948－2005）を遡ってその出現時期を調べてみた。すると次のようなことが判明した。

１－１）ワープ・・・・・・1980年初出～現在まで

1－2）ウォープ・・・・・記載なし

2－1）ワードローブ・・1956年初出、翌年から記載なし、1971年再登場～現在まで

2－2）ウォードローブ・1956年初出～1992年まで記載、以降記載なし

3－1）ワーニング・・・・・・・1994年初出～現在まで

3－2）ウォーニングランプ・・・1973年初出～現在まで

3－3）アーリーウォーニング・・1993年初出～現在まで

4－1）アウォード・・・・・1995年初出～2002年まで記載、以降記載なし

4－2）アワード・・・・・・1998年初出～現在まで

wardrobe, warning, awardの3つの組においては、原音に忠実な「オー」がまず導入され、のちに綴り字に影響された「アー」が登場している。そしてwardrobeとawardについては一定の共存期間を経て前者の「オー」の方は消滅している。またwarpに関しては最初から綴り字に影響された「ワープ」しか出てきていない。この現象はどのように説明されるのであろうか。次節ではその原因について考えてみたい。

1－4　文字を通して英語の情報を得る

私がまず最初に考えたのは日本における英語の言語環境のあり方である。日本においては英語は「第2言語」ではなく「外国語」として学ばれている。つまり、日本人は学校で英語を学ぶが、それを実際の日常生活において使うことは全くと言ってよいほどないのである。また英語を通して何かの情報を得る場合も、音声ではなく文字情報としてそれに接することが多い。特にインターネットが普及した昨今の状況ではその機会がさらに増えていると思われる。

そのことは、英語を教える仕事をしている、つまり一般の人よりは英語に接する機会が確実に多いと思われる自分自身の体験に照らしても明らかである。私が日本で実際に英語を使う必要があったのはこの3年間で見ると、本論に関わって本学に来ているカナダ出身の女性に質問した時、筆者の前任校で教えていたアメリカ人ALTの送別会に出席した時、オーストラリアからの来客を接待した時・・・ぐらいしか思い出せない。ただ文字情報としての英語に接するのは教材を選ぶときに読む原書やインターネット上の英文などが一定量はある。

このように音声としての英語に接することがほとんどない日本の言語状況を考えると、最初に正しい発音で導入された「アウォード」や「ウォードローブ」が時を経てやがて、綴り字の影響を受けた「アワード」「ワードローブ」に取って換わられることは想像するに難くない。

また物理の専門用語である「ワープ」に関しては、最初から文字情報を通して外来語として導入されたと推測される。その後もテレビ放映されたSF番組や漫画・アニメで頻出するうちに慣用として完全に定着することになったのであろう。

「ワーニング」という言葉もコンピュータ技術者がコンピュータが表示するWarningという語をそのままローマ字読みした結果生まれ、その後、雑誌や専門誌で使用されるうちに定着したもののようである。（註3）

1－5　生き残る具体名詞の外来語

外来語の生死を決めるもうひとつの要因として考えられるのは、それが具体名詞か否かという問題である。すなわち、物の名前としてのカタカナ語は現にあるものと結びついて記憶されるために、いったん正しい原音で導入されればそれが保持されやすいということである。

「ウォーニングランプ」は具体物と結びついたカタカナ語であったために初出の1973年から現在まで「ワーニングランプ」とはならずに生き残っている。「衣装箱、洋服ダンス」のカタカナ語である「ウォードローブ」も、最後に「ワードローブ」に取って代わられはしたが、40年近くも外来語として生き延びてきた。

先に取り上げた「ウォームアップ」についても、これは具体的な物と対応するわけではないが、具体的な動作と結びついているために綴り字発音の「ワームアップ」の台頭を阻んでいるのであろう（註４）。

さてここまで＜war＋子音＞に関するカタカナ外来語に関してその生成時期や表記の揺れの原因について考えてきたが、次節からはこの問題を英語の母語話者の立場からも見てみたい。

2　英語話者における綴り字発音

綴り字に影響されたカタカナ表記の外来語は先に取り上げたaward「アワード」などの他にも、glove「グローブ」、front「フロント」、Eden「エデン」、running「ランニング」などたくさんあるが、これは単に「英語の発音に無知な日本人だけの問題」とだけ片付けることが出来ない問題である。なぜなら、綴り字発音という現象は母語話者においても起こっているからである。音節構造に違いのある日英語を同じ俎上で論じることが出来るかという疑問も残るが、筆者の所属する研究会の実践で行っている「リズム読み」(註５）ではカタカナが大いに活躍していることを考えれば無理な比較ではないと判断した。

２－１　活字文化の普及と綴り字発音

藤井（1986：129－131）は英語史を概観して、18世紀末あたりから19世紀においてと、活字文化の普及した現在において「綴り字発音」という現象が起きていると述べている。以下はその要約である。

(1)　中英語期～近代英語期…綴り字は固定されず実際の発音に合わせていた。

(2)　印刷術が導入された15世紀末からJohnson's　Dictionaryの編纂（1755年）を経て18世紀末には綴り字の固定化がほぼ完成したが、音声の方は流動的で綴りとの間に隔たりが生じた。

(3)　18世紀末あたりから19世紀に、文字をよく知っている学校の教師や聖職者などの知識人の間で綴り字発音が行われた。

	正しい伝統的発音		綴り字発音	
e.g. London	[lʌ́nən]	→	[lʌ́ndən]	
beauteous	[bjuːtʃəs]	→	[bjuːtiəs]	（原文のbeautiousは誤植）
often	[ɔ́ːfn]	→	[ɔ́ːftn]	但し、[ɔ́ːfn] も残る
humor	[júːmə]	→	[hjúːmə]	但し、[júːmə] も残る

(4)　この綴り字発音の流行は次第に衰え、多くは音声法則に基づいた伝統的発音に戻っていったが、活字文化の普及と共に音声よりも文字に接する機会が増え、伝統的発音を知らない場合は綴り字読みに頼らざるを得ず、多くの人が綴り字発音をして英米人の間で実際に通用している。（註６）

e.g.　＜黙字を読む場合＞

almond　[ǽmənd] → [ǽlmənd]　　calm　[kɑːm] → [kɑːlm]

sword　[sɔːd] → [swɔːd]　　suggestion [sədʒɛ́stʃən] → [səgdʒɛ́stʃən]（米）

schedule　[ʃɛ́duːl] → [skɛ́duːl]（米）　vehicle　[viːkl] → [víːhikəl]

＜他の語の読み方から類推する場合＞

derby　[dɑ́ːbi] → [dɑ́ːbi]（米）　clerk　[klɑːk] → [klɚk]（米）

caste　[kæst] → [keist]　　Chicago [ʃikɑ́:agou] (米) → [tʃikɑ́:gou]

上記の(4)で取り上げられている単語を見てみると、それらは日常生活語というよりも書物で学ぶ学習言語と言えるものが多い。ふつう母語話者は言葉を聞いて学び、その後で綴りに接する。だから日常生活語に関しては概ね「正しい発音の獲得」→「正しい綴りの習得」という順序になり、綴り字発音というのは現れにくいと思われるが、学習言語においては綴り字発音が生まれる可能性が高くなるのであろう。（註７）

次節ではこの発音と綴りの不一致に苦しんでいる母語話者の子どもの問題に触れる。

２－２　「読み書き不能症候群」の子どもたち

英語の発音と綴りの乖離の問題については、寺島（2000）がこれまでの綴りと発音のルールを批判的に検討し、「合わせ文字」「＜CVC＞+e」に加えて「大母音推移」という通時的な観点も踏まえた、より簡潔な新ルールを提起している。

また寺島・小川（2005）においては、中学校の入門期に出てくる簡単な単語ほどこの現象が顕著に現れていることを指摘し、その時期の指導方法として最初は全てカナ振りをして読ませて、ある程度読める語彙を増やしてから母音の「字名読み」「名前読み」「分節法」などのルールを教えていくことが提起されている。

ところがこの英語特有の問題は外国語として英語を学ぶ日本人に限らず、母語話者にとってもその困難さが問題とされている。寺島（2005，2008）は英語における綴りと発音の著しい不一致は特別の病気だと考えられている「読み書き不能症候群」Dyslexiaの一因になっているのではないかと指摘する。以下はその主張の一部である。

> ところが最近、ディスレクシアといって、読み書き困難症候群の子どもたちが話題になっています。イギリスの子どもたちで頭のいい子でもディスレクシアは珍しくありません。それはなぜかというと英語はあまりにも不自然だからです。例えば、「HEAD」という綴りは「ヘッド」と発音するでしょう。ところが「HEAT」はどう発音しますか。（聞き手：ヒート）なんで一方は「ヘッド」、「エ」と発音して、他方は「ヒート」「イー」と発音するんですか。（聞き手：えっ、そう言われても）このようにしてアルファベットは表音文字だといいながら綴りと発音が一致しない、そういう単語が英語には多すぎるんです。だから、頭のいい子ほど、「なぜ？」「なぜ？」というふうに思って先に進めなくなる。（寺島2008：172－173）

この寺島（2008）の指摘を読んだとき、私は「読み書き不能症候群」に苦しむイギリスの頭のよい子どもたちの姿が日本の教室でtake「タケ」、us「ウス」のようにデタラメ読みしてしまう「頭がよくない」と思われがちな生徒たちの姿と重なって見えてきた。（註８）

中尾（1989：22－24）は、かつて英語には発音に合わせて意識的に綴り字を変えようとする運動があったことを紹介している。緩やかな改良案としてはノア・ウエブスター（1758－1843）によるもので、honour→honor, centre→center, traveller→traveler, though→thoの例がありアメリカ英語に定着したが、スウェーデンの学者サクリソンによる下記のような急進的な改良案は成功しなかったと述べている。

heigh→heit　　laughter→laafter　　anybody→enibodi　　could→kood

スウェーデンの学者がこのように考えたということは、文字については英語とほぼ同じアルファベットを用い、語順もSVOで共通しているスウェーデン語の学習者においても、英語の綴りと発音の不一致は大きな習得上の困難と感じられているということである。

であるならば、文字も語順も全く異なる日本語の学習者にとっては英語の習得ははるかに大きな困難

と感じられても何の不思議はない。日本の英語教師がこのような「言語的距離」という意識を少しでも持つならば、英語を学ぶ子どもたちの気持ちがより深く理解できるようになるのではないだろうか。（註9）

次節ではこの英語特有の発音と綴りを生み出してきた英語史の変遷を見てみたい。

2－3　発音変化を生み出した力学構造「強さアクセント」

英語史については、藤井（1986：3－6）、児馬（1996：96－101）、中尾（1989：18－27, 162－178）、中尾・寺島廸（1988）などを参考にしたが、藤井（ibid.）の記述が全体の大きな流れを捉えるのには最も分かりやすかった。なぜなら彼は英語史に現れる「末節語尾の消失」「母音の質的変化」「黙字の誕生」などの諸現象は英語が平坦アクセントから明確な強さアクセントに変わったことによって概ね説明できると述べているからである。藤井が挙げている具体例の一部を以下に紹介する。

(1)　末節語尾の消失

複音節で平坦アクセント		強母音	語尾消失	単音節
tellan（告げる）	[tel–lan]	→ [tɛl–lan]	→ [tɛl–lφ]	→ tell
dropa（しずく）	[drɔ–pa]	→ [drɔ–pa]	→ [drɔ–pφ]	→ drop

(2)　母音の質的変化

綴り字aの音［a］に力が加わり様々に変化→［ɑ］　［æ］　［ei］　［ɔ］

fa<u>a</u>ther　fa<u>a</u>t　fa<u>a</u>te　wha<u>a</u>t

(3)　黙字の誕生

		強母音	子音の消失	黙字の誕生
bird	[bə́:rd] →	[bɜ́:rd] →	[bɜ́:φd] →	[bə́:d]
walk	[wɔ:lk] →	[wɔ́:lk] →	[wɔ́:φk] →	[wɔ:k]

これらの単語の母音を実際に強く読んでみると語尾や語中の子音が自然と消えていくのを実感することが出来るし、母音の質的変化についても圧力を加えた風船が様々な形に歪むことをイメージすれば分かりやすい。（註10）

藤井はなぜ英語が平坦アクセントから強さアクセントに変わったか、その原因は分からないと述べているが、英語史において「急強緩弱」の力学構造への転換こそが現在の英語発音を生み出した主因であると主張している。私は記号研（註11）で学んだ理論「リズムの等時性」とそれを最大限に活用する指導技術「リズム読み」の史的ルーツに触れられたような気がして興味深かった。

次節では藤井が取り上げた音声変化の中から(2)「母音の質的変化」を取り上げたい。母音変異は古英語期から様々な形で起こっているが、その中でもとりわけ綴りと発音のズレに大きく影響したと言われている「大母音推移」に焦点を当てて考える。

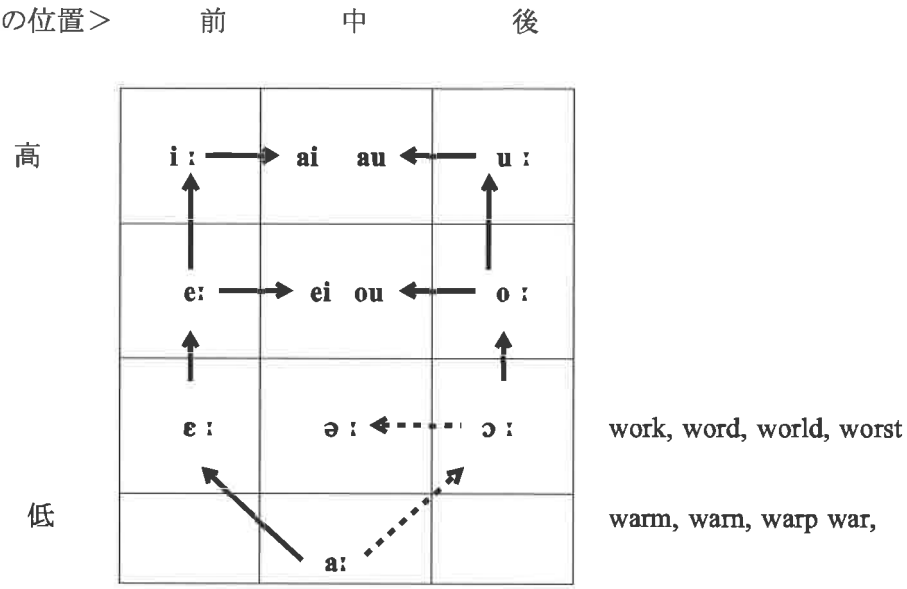
2－4　長母音［ɔ:］を生んだ「大母音推移」

母音変化は古英語から中英語にかけても起こっているが、その頃はstan［stɑ:n］→ston, stoon［stɔ:n］（＝stone）のように綴り字が発音に合わせて変化していた。中英語期の母音と綴りの対照表を見ると［u:］の綴り字がフランス式に＜ou＞＜ow＞と綴られたり、se（＝see）［se:］、se（＝sea）［sɛ:］のように同じ綴りでも発音の異なるものが一部あるものの、綴りと発音は概ね一致している。（中尾・寺島廸（1988：108））

ところが、中英語期から初期近代英語期（14世紀後半から18世紀前半）に起きた大母音推移（Great

Vowel Shift）の時には、一方で16世紀の印刷術の導入に端を発する綴り字の固定化が始まっていた。綴り固定化の傾向は続き、18世紀には今日の綴り字がほぼ完成している。1755年に刊行されたジョンソン博士の辞書は固定化に大きな役割を果たしている。つまり、綴り字が固定化される中で発音はどんどん変化して行き、一対一対応が大きく崩れていったのである。

実際の母音変化を示す図を以下に示す。これは寺島（2000：216）と遠藤（1992：142）を参考にして作成したものである。なお、表にある発音記号が示すように大母音推移は強勢のあった「長母音」に起きた変化である。



破線矢印は寺島（2000：211－212）が「大母音推移と深く関わる変化」と位置づけているもので、表の右側に示したwork［wə:k］とwarm［wɔ:m］などがそれに対応している。

2－5　長母音［ɔ:］のふたつの成り立ち

寺島（2000：212）では、<aという文字にlが続き、その後に母音字がない時は［ɔ:］という発音になる>というルールを挙げて、母音字aを［ɔ:］と発音する綴りを下記のように整理している。

<al>			<aw>	<au>	<war>
talk	all	wall	saw	haul	war
walk	tall	fall	draw	fault	warn
salt	small	ball	lawn	Paul	warm
halt	small	ball	drawn	because	swarn

中尾（1985：112）は近代英語期の母音の /ɔ:/ が由来する元の中英語の音韻には5種類あると述べ、その内の2つは /au/ が滑化したものと /a/ の後舌化したものであるとして次のような例を挙げている。

/au/ が滑化したもの

straw, draw, dawn, fawn, law / cause, author / bought, brought, thought / all, walk / fault

/a/ の後舌化したもの

war, ward, swarm

これに従えば、<al><aw><au>の場合に関しては［au→ɔ:］のように母音シフトが起こったこと

になり上記の表は通時的観点から２つに分割される。子音の前のlの音はmilk［miuk],silk［siuk],film［fium］という標準発音交代形が示すように /w/ と同様に /u/ とみなすことが出来るので、学習者がtalkを２通りに［taukタウク］[tɔ:kトーク］と読み比べすれば、母音シフトを実感的に感じとることが出来るだろう。

一方、＜war＞の方はそのような導き方とは異なって、［wɑ́:］ワーと言いながら舌の位置をだんだん引いてみることによって音が変化することが実感できるだろう。

このように音の変化を体感・実感させることと併せて、実際にこの図に出てくる長母音を下から順に発音させたりして母音の音とその位置を確認させたり、さらにはこの「大母音推移図」自体を教室に持ち込んで矢印に対応する単語を考えさせたりすることも知的関心を呼び起こす発音学習となるかもしれない。最初は発音記号でなくてカナで「ア、エ、イ」「オ、ウ」と記したり単語の候補を与えておくなりすれば、意外と簡単に取り組める実践になるのではないだろうか。（ただこれは学習者に、ある程度語彙が蓄積された段階での指導法になると思うが。）

最後に、子音＋arの発音の原則は「綴り字読み」であるが、子音がwの時だけが例外的な、非綴り字読みの［ɔ:］となることを確認する。

＜原則＞子音＋ar　［ɑ́:］＝綴り字発音

e.g. bar, barn, car, card, cart, far, farm, hard, mar, march, mark, par, park, tar, tart,

但し、w+arの時は［ɔ:］＝「大母音推移」による例外　（註12）

e.g. war, warble, ward, wardrobe, warm, warn, warp, wart, award, reward, swarm

さてここまでで、カタカナ外来語「アワード」からスタートしてその原語awardの発音の源流まで辿りつき、そしてそれが「大母音推移」によって生まれた例外的発音であることを確認した。そこで次はこのような日本語「アワード」(３音節語）や英語における綴り字発音のaward［əwɑ́:d］(２音節語）が意思伝達においてどれくらいの理解度を持つものなのかを節を改めて考えてみたい。

3　綴り字発音の理解度

3－1　日本語の「カタカナ」はどれだけ通じるか

英語学習において「カタカナ」を用いることは英語らしい発音の習得への大きな障害になるという考え方は以前からよく聞かれるが、それへのひとつの反証として金谷（2008）にある興味深い実験の話を紹介する。

> それはそうとして、そもそも本当にカタカナは通じないのだろうか。私が以前、卒論指導した学生がこのことを研究した。百三十個の英単語を選んで、それらの発音をカタカナで表し、中学生に読ませて録音した。中学生はそれらの単語を一つも知らないので、カタカナから本当の英単語を想像することはできない。録音したものをアメリカ、イギリス、オーストラリアのネイティブ・スピーカーたちに聞かせて、書き取りテストをした。／さて読者諸氏は、百三十個の単語のうち正しく書き取れたのは何個ぐらいだとお思いだろうか。／答えは四十八パーセント、つまり、だいたい半分は正しく書き取られたのである。この数字を多いと思うか、少ないと思うかは読者諸氏の期待値による。（同書：60－61）

どのような単語が選ばれたのかが分からないので当て推量になるが、私はこの数字は実際の会話ではもっと高くなるはずであると考える。なぜなら、そのカタカナ語を文脈の中で聞くことになるし、分からないときには相手に聞き返すことも出来るからである。

外来語でも「ホチキス」のように日本語独自のものでなければ、英語の原音を概ね写しとったものがほとんどなので、たとえそれの日本語表記が複数個あったとしても強勢が来る音節を強く読むことで英語の音に近似させることが可能になるだろう。ただアクセントの位置を間違うとかなり通じにくくなると推測される。

	外来カタカナ語		一カ所を強く読む		他の所が弱く聞こえる		
(1)	メインテナンス	→	**メ**インテナンス	→	**メ**インテナンス	→	maintenance
(1')	メンテナンス	→	**メ**ンテナンス	→	**メ**ンテナンス	→	maintenance
(2)	ワシントン	→	ワ**シ**ントン	→	ワ**シ**ントン	→	?
(2')	ワシントン	→	**ワ**シントン	→	**ワ**シントン	→	Washington

外来語が将来形成されるかもしれない「日本式英語」の語彙にどのような役割を果たしうるのかという問題については先行研究があるようなので、さらに調べてみる必要があろう。次節では英語の発音変種について論を進めたい。

3－2　英語の「発音変種」はどれだけ通じるか

玉木・寺島（2008）は、非母語話者も使う「国際英語」と記号研方式教授法の関係を論じた論文であるが、その中で音声に関して記号研の考え方と一致するものとして鳥飼（2003：14）が紹介されている。

> だから、むしろ、どこにストレスを置いて、そして、音節数を守っていくという、音とリズムが大事で、あまり細かいことはいいのではないかというふうなことも言えるわけです。

鳥飼（2003）が言う「細かいこと」とは、寺島（2008）が言うところのLocal　Errorsのことであるが、awardの発音変種［əwɑ́ːd］もLocal Errorsの一つと見なしてよいだろう。この変種も普通は文脈の中で、例えば、/ Hi gət ði xxx əwɑ́ːd / というふうに出てくるのであるから、語順や他の語彙情報にも助けられてその意味はおおむね理解されるだろう。

中尾（1989：20）にはあいまい母音［ə］について興味深い記述があるので以下に紹介する。

> 発音の生起頻度はどうか。いちばん頻繁におこるのはあいまい音［ə］で、これは<a, i, u, e, o>どの母音でも表される。この音は英語の代表音で、あらゆる母音が［ə］で置き換えられて発音されても英語を母語とするものならば十分理解できるという。例えば、I hate John very much.を［əi həit dʒən vərə mətʃ］のように。

つまり、先ほどの英文で言えば、/ Hə gət ðə xxx əwəːd / のように言っても通じるということになるのだ。このことも発音変種［əwɑ́ːd］が理解可能なものとなりうることの証左であろう。

コミュニケーションが音声情報以外のものにも大きく支えられていることは日本語の場合で考えてみてもよく分かる。例えば、筆者は50年以上も日本語母語話者として毎日何不自由なく生活しているのであるが、私がこの原稿を書いている間だけで私の日本語には3個の発音変種［*shituyou（必要）、*hippitu（執筆）、*shoushutu（消失）］があることをワープロソフトは教えた。つまり、これらの発音変種があっても日常生活には何ら支障がないということである。

この発音変種に関しては、玉木・寺島（ibid.）の中で取り上げられている日野（2001）は次のように最近の研究成果をまとめている。

> 80年代後半からの国際英語研究では、特に談話規則や社会言語学的規則の分析が注目され現在に至っている。この背景となった要因のひとつは、英語変種の音声上の相違などはコミュニケーションにはそれほど深刻な影響を及ぼすものではない、という認識が高まったことである。つまり、発音の違いは、従前は変種間における顕著な相違という印象が強かったわけだが、実際には若干の慣れに

よって比較的容易に聴き取り可能となるものであるということが、Smith and Bisazza（1983）などの研究で明らかになった。また、Smith and Rafiqzad（1979）の大規模な実験により、非母語英語変種の発音は母語英語変種と同程度に理解されやすいものであることが示されたことも大きかった。

これらの先行研究において、どのような母音や子音の発音変種の理解度が試されたのか、とくに本論で論じた母音における変種については注目して見てみたいと考えている。

4　氾濫するカタカナ語と英語教育のありかた―まとめにかえて

本論では「アワード」というカタカナ語を手掛かりとして、まず日本語におけるカタカナ外来語の表記のゆれについての考察を行った。そして次に、綴り字発音がこれらの外来語だけでなく英語の母語話者の間でも起きている現象であることを突き止め、さらにその綴り字発音のカタカナ語は将来確立するかもしれない国際英語の一変種としての「日本人英語」(註13）においても何らかの役に立つ可能性があることを述べてきた。

しかし私はその変種を英語教師が教室で教えればよいと言っているのではない。玉木・寺島（ibid.)が「日本人英語が確立しないうちは、インプットは英米人による「正しい」英語で行い、アウトプットの段階で、Local Errorsは無視する姿勢が大切である」と指摘しているように、言語習得においては、教師は例外事項も知っていて教える（枝葉の項目として）が、その誤りに対しては寛容であることが大切だということである。

カタカナ語について一言付け加えるならば、本論で取り上げた「アワード」を始めとして、最近とみに日本語の中のカタカナ語使用が多くなっている状況を感じる。新型インフルエンザが流行したときに「フェーズ」なる新語が登場し、突風発生のニュースでは「ダウンバースト」なる気象庁公認専門用語が使われたが、いったい日本国民の何割がこのカタカナ語を理解できたのだろうか。（註14）

このカタカナ語の氾濫について、谷川（2008）は「英語の言葉をある種無制限に自国語の中に取り込む姿勢は、欧州やアジアの国々の言語を話す人々に尋ねて回っても見つけることができなかった」と述べているが、日本のこの特殊な文化状況はどのようにして生まれてくるのか。

その原因について加藤周一は國弘（2000）の中で、コミュニケーションの道具として役立たないか、あるいは極度に不便なものをわざわざ使って、便利な日本語を使わないのは、英語に対する劣等感、もっと言えば、一種の奴隷根性であると喝破し、さらに「英語教育がそれを目的としたのではないけれど、英語教育を強調することが、学校および社会にそういう風潮を生み出す一因になった」と述べている。つまり、加藤は現在の英語教育のあり方がカタカナ語氾濫の要因であると指摘しているのである。英語教育に携わる者はその指摘を真剣に受け止める必要があるのではなかろうか。

最後になったが、本論をまとめるにあたって寺島隆吉氏（岐阜大学教授）には忙しい時間を割いて筆者の話を聞き参考文献の紹介などいくつかの貴重なアドバイスをしていただいた。また県立図書館の職員の方には書庫の奥から分厚くて重い用語集を何回も出す労を取っていただいた。それらの好意に謝意を表し本論を閉じる。（註15）

Notes

1．調べてみたカタカナ発音表記採用の英和辞典は次の5冊である。いずれも高校生用の辞書として編まれているものである。

「ア**ウォ**ードゥ」…『ニュースクール』(研究社、1999)

「ア**ウォ**ード」…『ニュー・ヴィクトリー・アンカー』(学研、2000)、『アルファ・フェイバリット』(東京書籍、2003)、『ベーシック・ジーニアス』(大修館、2002)、『エクスプレス・Eゲイト』(ベネッセ、2007)

2．Warnerは人名であるが、映画社を設立したWarner兄弟のほうは「ワーナー・ブラザーズ」として日本で定着している。またLungdon Warner (1881－1955) という人物の名前はラングドン・ウオーナーとして知られている。

3．「ワーニング」については、あるサイトに掲載されていた「情報処理用語正誤表」に次のような記述があったので以下に紹介する。

日本のコンピューター技術者（特にソフトウェア技術者）は概して不勉強であるというお話である。「ワーニング」というのは、コンピューターが表示した「Warning」という語を、調べもせず、想像力も働かせずにローマ字読みしてしまった結果である。にもかかわらず、それをそのまま雑誌や専門誌の記事の中で使用したり、専門書の文章の中で使ったりするのだから始末が悪い。「警告」という立派な日本語があるのに、なぜそれを使わないのか。辞書を調べれば、発音を知ることができるし、訳語も分かる。あるいは、war（ウォー、戦争）やwarm（ウォーム、暖かい）などから類推すれば、warningが「ウォーニング」であろうことは容易に想像がつく。「スター・ウォーズ」や「ウォーミング・アップ」を知らぬわけではあるまい。辞書を引いたり、想像力を働かせたりする手間を惜しむと恥ずかしいことになる。（1999年7月）

4．この2つの外来語表記の問題について本学の米田真理氏（日本語担当）と偶然話す機会があったが、そのとき氏は“warm”と“worm”、“walk”と“work”のように2つの言葉を弁別する必要性がある場合は、それに対応するカタカナ語表記はひとつに決まりやすい。しかし、“award”や“wardrobe”のようにその必要性がない時には「アワード」「アワード」、「ワードロウブ」「ウォードロウブ」のように複数の読み方が並立し、やがて時が経つにつれて綴り字発音の表記の方に収斂されていくのではないかという指摘をされた。

この指摘を受けて気づいたのだが、並立表記には「他語との弁別不要」という要因の他にも、ひとつの単語に「トラック」「トロッコ」(truck) や「ストライク」「ストライキ」(strike) のように当初から用いる場面が異なって別の意味が割り当てられ並立する場合もある。同様の要因による並立表記には下記のような例もあるが、この場合は語源の違いも表記の違いに反映していると考えられる。[田中建彦(2002：166－168)、鈴木孝夫（1975：101)]

「ガラス」　＜オランダ語　Glas
「グラス」　＜英語　glass

「コップ」　＜オランダ語　Kop
「カップ」　＜英語　cup

「ゴム」　＜オランダ語　Gom
「ガム」　＜英語　gum

5．「リズム読み」とは寺島隆吉氏が考案した独自の音読練習メソッドである。以下に示すような強弱記号に合わせてカタカナを読んでいくと自然に音の連結や脱落が起こり英語らしい発音になっていく。

詳しくは寺島（2000）を参照。

□ ・ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ □ ・ ・ □ ・ □ □
This is the cat that killed the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.
ズィス イズ ザ キャット ザット キルド ザ ラット ザット エイト ザ モルト ザット レイ イン ザ ハウス ザット ジャック ビルト

6．寺島隆吉氏は、現在often、bombを綴り字通りに［ɔ́:ftn］、［bɔ́:mb］のように発音する例が頻繁に見られ、とくに前者についてはN・チョムスキーやH・ジンのような知識人階級では普通に聞かれると述べている。

7．「綴り字発音」とは逆に日常生活語では「発音綴り」というものが現れる。藤井（1986：133－136）が「発音綴り」の例としてあげているものはほとんどそのような語である。

e.g. want to→wanna　　got to→gotta　　perfect→perfeck

already→awready　　machine→masheen　　some→sum　　talk→tawk

中尾（1989：19）は「アメリカ人やイギリス人はわれわれ日本人が英単語を正確に綴ることができるのを知って驚く」と書いているが、私自身にも次のような体験がある。数年前のことであるが、当時勤めていた学校の米人ALTが自己紹介の時に自分の身長をheigthと板書した。私は授業が終わった後で「heigthではなくてheightですよ」というと、彼は両親がずっと［haiθ］と言っていたのでheigthだと思いこんでいたと答えた。彼の親はそれぞれ大学教員と高校教員であったが、そのように学歴や家庭環境に恵まれた人でもこのようなことが起こるのであれば、ジョナサン・コゾルが指摘するようなアメリカ教育の実情を考えたときには正しく綴れない状況はさらに進行し、新語“aword”が誕生する日がやがて来るかもしれない。

ジョナサン・コゾルは公立学校の教師として作家として数十年にわたりアメリカの教育制度の不公正について調査し発表してきた人物で、その著書Death At An Early Age（1967)『死を急ぐ幼き魂：黒人差別教育の証言』によって全米出版賞（National Book Award 1968）を得た。それ以外の彼の著書にはAmazing Grace『アメリカの人種隔離の現在（いま）――ニューヨーク・ブロンクスの子どもたち』(世界人権問題叢書、明石書店、1999)、Illiterate America『非識字社会アメリカ』(世界人権問題叢書、明石書店、1997)がある。彼の最近の著書はThe Shame of the Nation: The Restoration of Apartheid in American Schooling.（2005)『国家の恥：アメリカの学校教育におけるアパルトヘイトの復活』である。

筆者は最近、林（2008）やコゾルの講演記録（寺島隆吉氏が開設するサイトにある）を読んでアメリカの教育の深刻な実態に驚かされただけでなく、日本でも同様な状況が起こりつつあるのではないかという危惧の念を抱いた。

8．イギリスにおける「読み書き困難症候群」の子どもたちについて寺島氏は筆者に次のように述べている。「寺島（2008）のインタビューでは、「なぜ？」「なぜ？」と問うて先に進めなくなる子どもは論理的、数理的に思考するという観点から「頭がよい」と述べたが、実際には「文字が読めない、書けない、発音できない」ということで「頭がよくない」とみなされることが一般的である。そういった意味においては日本の教室で「デタラメ読み」する子どもたちと同じと言えるかもしれない。」

9．中島（1989：23－24）によれば、サクリソンによる急進的な綴り字改革運動が上手く進まない最大の理由は英語の綴り字は一般に考えられているよりはるかに発音を忠実に反映していることであったと述べている。17,000語をコンピュータ分析したところ84%が規則に従って綴られているとことが分かり、また別の調査では対応性は75%で、不規則綴りは日常語の400語だったという。これは寺島（2000）で述べられている「入門期に出てくる簡単な単語ほど不規則で、多音節語ほどローマ字読みしやすい」という主張を裏付けるものであるが、このことはまた文字を導入する入門期にはいかに多くの授業時間が必要であるかということも示しているのではないだろうか。

10. 北村（1980：140）はこの「母音の質的変化」について、話し手が以前よりも下あごを少し下げ気味で発音する習慣が出て来て、低い母音がより高い母音に推移することになったからであると述べている。この「下顎が下がる習慣」というのは重力の法則からすれば極めて自然で合理的な説明であるように思えるが、それが藤井の主張する「力学構造の変化」とどのように繋がるかについては私にはまだ謎である。

11. 「記号研」は寺島隆吉氏が1986年に設立しその代表を務めている英語教育の研究会で、正式名称は「英語教育応用記号論研究会JAASET」である。

12. w+arの時のarを［ɔ:］と発音することは「大母音推移」による例外であると本論では述べたが、前の音の特徴をそのまま後の音に押しつける「同化」と考えることも出来る。つまり、前の音wの円唇がそのまま後の母音に押しつけられ［ɑ］が円唇化して［ɔ］となったのである。これは調音上の便宜を求める「労力節約の法則」に基づく現象のひとつである。同様の例には、water, want, walkなどもある。［藤井（1986：63)］

また藤井（1986：147－148）は、英語の /w/ 音と日本語のワwaの頭音を比べて、後者には円唇性はほとんど認められず、音声学的には「ゥア」という一種の二重母音であると述べている。このことから考えると、awardが「アワード」となったのは綴り字発音という観点からだけでなく音声的な側面からも説明することができるだろう。

なお、安藤（1985：337－338）はworで始まるword, worm, work, worse, worldのような語は中英語においてはwerk, wurdのような形を取っていたので、fern, serventやfurn, murderと同様な母音変化を起こして、［ə:］と発音するようになったと述べている。

13. 玉木・寺島（2008）には、また、将来確立するかもしれない「日本人英語」のひとつのモデル例として鈴木（2000）の提唱するイングリック（Englic）が紹介してある。その「英語」の特徴としては、「３単現のs不要」「不規則な複数形・過去形の廃止」などの項目が示されている。表音文字が基本となる言語において独自の例外的位置を占める英語の発音（400語程度の基礎的日常語だけなのであるが）についても「綴り字発音」を基本とした簡便な発音法則が将来出てくる可能性も否定できないのではないかと思う。

末延（2009）の行っているカナ振りにはその可能性らしきものを見て取ることが出来る。彼は以下に示す例文のwarmに対して「ワーム」と仮名を振っている。インターネット事典ウィキペディアに掲載されていた彼の経歴（長い間中学高校で教え最後は大学教授を勤めている）から考えると、これは単なるミスではなく彼が意図的に綴り字発音を行っているのではないかと推測される。

Parks are / filled with / people en– / joying the / warm / season.
（パークサ フィルドウズ ピープレン ジョイニングザ ワーム スィーズン）

末延は中国で英語を教えていたときの話として、話す英語が分からないと中国人大学生から苦情を言われ最後には大学から追放されてしまうことになるアメリカ人教師に「単語を一つ一つ、丁寧にゆっくりしゃべればよい」と助言している。つまり彼は、英語の母語話者は非母語話者が理解できるように連結された音「パークサ」を「パークス＋ア」と分解して話せと主張しているのである。

この末延の考え方はラミス（1976）の「英語を学びたい日本人は東南アジアの人たちと一緒になって、アジアのスタイル、文化、歴史、政策を反映するアジア系の英語を作り出してゆけばよい。そしてその時、もしアジアへやって来たアメリカ人が、この新しい英語が解らないと文句を言ったら、彼こそ、外国語学校へ送られるべきである（pp. 17－36)」という言葉と通じるところがあって共感を感じる。

がしかし、彼の「単語を一つ一つ、丁寧にゆっくりしゃべればよい」という主張には英音法の幹であるリズムの等時性という考え方は全くない。本論の第３－１節でも指摘したように、発音変種であって

も「リズムの強弱」を効かすことで母語話者にも理解可能な音に生まれ変わるのである。真の意味の「国際英語」は非母語話者の間だけで通じるものではなく母語話者をも包み込んだものをイメージすべきであると筆者は考える。

14. カタカナ語よりさらに理解困難なAED、ATM、ETC、GMO、FAQなどの頭字語achronymも日常生活の様々な場面に登場している。この頭字語について、アーサ・ビナード（2009）は「頭文字の隠れみの」と題する面白いエッセイを書いているのでその一部を以下に紹介する。

> takeoverという「乗っ取り」を意味する英語があるが、あまりいい印象ではない。そこでmergers and acquisitionsに置き換えられることが多い。さらにはM&Aと略され、それが日本に輸入された。乗っ取り屋にとって、跋扈しやすい社会環境を整えるための言語作戦なのではと、疑り屋のぼくは思っている。／「家庭内暴力（domestic violence)」をDVと表記するのも、煙幕のように思えてならない。しかし一番うさんくさいのはBSEだ。「狂牛病」というドンピシャリの名称があるのに、恐ろしさが消費者に伝わると困るからなのか、無臭のローマ字に変名させられた。／「日本放送協会」をNHKと、日本語の発音のまま置き換えられた前例があるので、「狂牛病」をせめてKGBという略語にしてほしかった。そうすれば陰謀の怪しい香りだけでも、なんとなく残ったろうから。（同書p. 202）

この文を読むと英語圏でも言葉のすり替えや誤魔化しがあることが分かる。なお、このエッセイを読んだすぐ後に、新聞の見出しで「日米FTAの締結」という言葉を見つけた。これも「恐ろしさが」国民に「伝わると困るからなの」だろうか。これは当時政権を執るのではないかと前評判が高かったある政党の「マニフェスト」に出て来た言葉である。

15. 本論は英語教育応用記号論研究会（JAASET）の2009年度夏の研究会において発表されたが、その討議の中で寺島隆吉氏から、非母語話者の数が母語話者の数をどんどん上回っていく状況の中で、「国際英語」の発音は＜綴り字発音＞だけでなくアクセント規則（例えば、record→(n) [rékərd], (v) [rikɔ́:d] のように、名詞は前の音節に動詞は後ろの音節にアクセントの位置が来る）などにも拡大しながら、よりシンプルな方向にその発音原則が確立されていく可能性が高いという指摘があった。また寺島氏は、英語が平坦アクセントから強さアクセントに変わった要因については、遊牧民族として異民族と接し対話する機会が多い状況の下で、意思伝達をより明確にする必要性から生まれたのではないかという私見を紹介された。

References（Books）

安藤貞夫（1985)『続・英語教師の文法研究』大修館
ビナード、アーサー（2009)『日々の非常口』新潮社
遠藤幸子（1992)『英語史で答える英語の不思議』南雲堂
藤井健三（1986)『現代英語発音の基礎－日英音声比較』研究社
林壮一（2008)『アメリカ下層教育現場』光文社
日野信行（2001)「国際英語の多様性と英語教育」『言語文化研究／大阪大学言語文化部［編］』第27号：261－283
金谷憲（2008)『英語教育熱～過熱心理を常識で冷ます』研究社
北村達三（1980)『英語を学ぶ人のための英語史』桐原書店
國弘正雄（2000)『英語が第二の国語になるってホント!?』たちばな出版
児馬修（1996)『ファンダメンタル英語史』ひつじ書房

ラミス、ダグラス（1976)、斎藤靖子訳「イデオロギーとしての英会話」『イデオロギーとしての英会話』晶文社

中尾俊夫（1985)『音韻史』大修館書店

中尾俊夫（1989)『英語の歴史』講談社

中尾俊夫・寺島廸子（1988)『図説 英語史入門』大修館書店

末延岑生（2009)「ニホン英語とネイティブ英語」『日本「アジア英語」学会 ニュースレター』第28号：1－3

鈴木孝夫（1975)『閉された言語・日本語の世界』新潮社

鈴木孝夫（2000)『英語はいらない!?』PHP研究所

玉木智・寺島隆吉（2008)「「国際英語」教授法と記号研方式」『岐阜大学教育学部研究報告：人文科学』第57巻1号：101－162

田中建彦（2000)『外来語とは何か』鳥影社

谷川幹（2008)「カタカナ語使用の心理」『月刊言語』2008年2月号、大修館書店・東京

寺島隆吉（2000)『英語にとって「音声」とは何か』あすなろ社／三友社出版

寺島隆吉（2005)「英語教育の目的と方法」『岐阜大学教育学部研究報告：人文科学』第54巻第1号：143－176

寺島隆吉（2008)「外国語活動『小学校英語』を考える」『2008年版学習指導要領を読む視点』(pp. 163－188)白澤社

寺島隆吉・小川勇夫（2005)「英語入門期における単語発音の指導（上)」『岐阜大学教育学部研究報告：教育実践研究』第6巻：157－180

References（URL）

情報処理用語正誤表

http : //www.cam.hi-ho.ne.jp/mendoxi/bug/errata.html

ジョナサン・コゾル講演「教育：国家の恥」、オレゴン州ポートランド2005年9月30日、翻訳：寺島隆吉・野澤裕子・岩井志ず子・寺島美紀子

http : //www1.gifu-u.ac.jp/~terasima/JONATHAN%20KOZOL.translation090609.pdf

末延岑生

http : //ja.wikipedia.org/wiki　末延岑生